



妖怪のい
るバイト
山



川崎ゆきお

バイト先を転々と替えている高島は、相談員に相談した。

相談員は白髪のお爺さんだった。その施設にうまく入り込めたのだろう。この相談員は、従って、もう相談する必要はない。職を得ているからだ。

白髪相談員は会社の重役だったようで、恰幅がある。という風に高島にも見えた。バイトばかりなので、上位の人と接する機会はなかったが、それでも、何となく雰囲気分かる。多くを体験し、いろいろな上司や部下を見てきた人だ。高島は、この人に悩みをぶつけてみた。

「普通がない」

白髪相談員は、興味を抱いた。

「普通がないとはどういうことですか」

「普通の人ほとんどなんですが、いるのです」

「いる」

「普通の人の中に、混ざっているのです。僕は普通の職場で、普通に働きたいのです。その範囲内なら、何の問題もありません。普通の職場で、普通の人たちと」

「何が混ざっているのですか」

「普通じゃない人がいるのです。妖怪です」

「普通と妖怪。これは飛びすぎですねえ」

「すぐに分かります。それがいないように願っているのですが、どのバイト先にもいるのです。それがいなかったバイト先では長続きしました。しかし、赤字か何かでつぶれました。そこにはいませんでした。妖怪が」

「ではバイト先を転々とするのは妖怪がいるからですか」

「そうです」

「どのような妖怪ですか」

「理解できない仕打ちを受けます」

「それは、あなたには責任のないことで？」

「そうです。普通なら、そんな言いがかりを受けないはずなんです。僕は普通にやっています。でも暗黙の何かがあって、それに触れるようなんです。これって、空気を読むってことだと思うのですが、僕には読み切れません。その人はベテランのバイトで、又シのような人です。又シすなわち妖怪ですよ。池の又シのような」

「要するに職場での人間関係なんですね」

「そうです。どの職場も普通じゃないんです。これって、おかしいと思いません」

「まあ、それぞれ事情があるのでしょうかねえ」

「それって、書いてないんです」

「ああ、まあ、そうですねえ」

「どうしたらいいのでしょうか」

「人と触れる機会の少ない職種ならいいんじゃないですか」

「それは寂しいです。やはりいろいろな人の中で仕事がしたい」

「人は嫌いじゃない？」

「はい」

「じゃ、あなたはきっと社長タイプなんですよ」

「そんな柄じゃありません」

「柄ですか。柄」

「柄というかタイプです。それにそのレベルに上れませんから。要するに僕は普通なんです」

「普通ですか」

「標準的なんです」

「それが一番難しく、そしてほとんど存在しないタイプですよ」

「え、普通が一番多いんじゃないのですか」

「標準が一番少ないのです。だから、標準に合わせようにも、標準的な人などほとんどいないのですから、特殊な人たち相手、ということになります」

「じゃ、みんな特殊なんですか」

「特殊は言い過ぎでしょうが、まあ、あなたが思っているような標準タイプは、逆に特殊となりますかな」

「意味が分かりません」

「最高の美女とは、一番標準的な顔です」

「ああ」

「体型もそうです。そして誰もが、そこからずれている。そのため、標準に少しでも近い人が美男美女で、スタイルのいい人になります。しかし、まだ完璧な標準ではありません」

「そうなんだ」

「だから、あなたは存在しない標準を求めすぎているのです」

「じゃ、普通はないのですね。普通の職場も」

「あなたのいう普通の職場があるとすれば、それは機械でしょうねえ」

「ああ、ロボットやオートメーションのような」

「しかし、職場に嫌な人が必ずいる。これは何でしょうか」

「きっとその人は、あなたのことが嫌なんでしょうねえ」

「それはキツイ」

「それはまあ冗談ですよ」

「今度またバイト先を見つけましたが、どうすればいいのでしょうか。妖怪がいる可能性は大です。ほとんどそうでしたから」

「私は妖怪封じのお札は発行できません」

「僕が我慢すればいいのでしょうか」

「それが出来ないから転々としているのでしょ」

「まあ、そうです」

「そんな妖怪さんがいらっしゃるのなら、かわいそうなお病人さんだということでしょうねえ。哀れんでさしあげなさい」

何となく、この白髪相談員が怪しくなってきた。

「あなたも」

「え」

「あなたも普通じゃない」

高島は席を立ち、退散した。

了